

坂東真理子先生

[昭和女子大学学長]

ベストセラーとなった著書『女性の品格』で知られる坂東先生。凜とした佇まいと優しい口調は、すべての女性のお手本ともいえる。そんな坂東先生の小学校時代について、そして今の先生たちに願うことを語ってもらった。

**多様な人と交流ができた小学校時代**

なによりも現在の私にとって一番良かったと思えるのは、小学校時代に人との出会いがたくさんあったことです。私は小学校時代、勉強も運動も得意な子どもでした。当時通っていたのは、地域の公立学校でした。そこでは、地域の子供たちは勉強ができる子もあまり勉強熱心ではない子も皆同じ学校でした。むしろ本に熱中する私のようなタイプの子は少なかったと思います。そんな環境でしたから、今でも地元に戻ると、旧友は商売をやっていたり、農業を営んでいたりと、それぞれ皆違う道を歩んでいる方との交流があるんです。いろんな立場の友達がいる中で育ったことが、なによりも私の人間形成に役立っていると思います。今は早い段階から、私立公立、その中でも細かくランク付けがなされていますよね。たとえば一流校と呼ばれるような学校では、同じように勉強ができる子同士のつながりばかりになっているように思います。各々の特性を活かせるような環境も大事だとは思いますが、個人的な体験としては、小学校ではいろんな人と出会える、触れ合えるということも大事なことだと思っています。



**「子どもの幸せを一番に」
それが先生の品格です。**

子どもの個性を尊重してあげてほしい

私の通っていた学校では「できる子は放っておいても大丈夫」というような雰囲気があって、逆にできない子に目をかける先生が多かったんです。そんななかで、忘れられないのは、中学校時代に教頭をなさっていた武田先生です。先生は数学の教科書の執筆もなさっていたのですが、まだ作成中の教科書を私にやらせてみて理解度を試すなど、授業以外の部分でもマンツーマンで私のことを育ててくれました。過去のそういった体験から、今の先生方にはぜひすべての子どもたちのことを思って欲しいと感じます。もちろん、極端に学力が上や下の子というのは先生にとってもフォローしにくい部分があると思います。しかし、皆平等に、ということではなく、それぞれの個性や違いを先生方がおもしろがってもらいたいです。変わっていると言われるような子にも違和感を持つことなく接すること、それが子どもたちの未来に大きな良い影響を及ぼすのではないのでしょうか。

応用力のカギは読書にある

現在、私は昭和女子大学の学長を務めています。教育の現場で感じることは子どもの応用力を鍛える重要性です。子どもたちには覚えるだけでなく、考えて答えを出す機会が必要だと感じます。それは、やはり本を読むことで鍛えられるのだと思います。本を読んで考えることで、読解力が身に付き、自然と国語以外の教科にも良い影響を及ぼします。

本来は大学でも本の音読を行いたいのですが、大学では人数が多いのでなかなかできません。ぜひとも小学校では、音読や読書に時間を割くことをおすすめしたいですね。きっと子どもたちの将来に役立ちますよ。

先生も“品格”をもって

私は著書の中などで、品格という言葉を使いますが、一番品格のない行動とはなんでしょう？ それは他人を思いやることなく、自分さえ良ければいいと考えることです。今、教育現場では「モンスターペアレント」という問題が起きていると聞きます。これはまさに品格のない両親の問題ですが、トラブルの時こそ、先生が品格のある行動をとるべきだと思います。では、理不尽な両親に対してどのように接したらよいでしょう？ これは難しいことですが、コミュニケーションを取るのが、一番の方法だと思います。相手の気持ちを考えて、じっくりと話し合っていくしかありません。もちろん、対話が通じないところから始めるのだと思いますが、それでも相手の立場に立って子どもたちの幸せを思って話をする、それが先生の品格と言えるのではないのでしょうか。そのためにも先生方には、いろんな世界の人たちと付き合っ、ご自分の世界や許容度を広げてもらいたいですね。私が過ごした小学校時代のように、いろんな子が一緒に勉強をする環境でなくなってきている現在だからこそ、先生方の見聞の広さが大切になってくると思います。

坂東真理子 (ばんどうまりこ) | プロフィール

1946年、富山県生まれ。東京大学文学部卒業後、総理府入省、80年、ハーバード大学に留学を経て、統計局消費統計課長、埼玉県副知事、在豪州プリズベン総領事、内閣府男女共同参画局長等を経て、2003年に退官。現在は昭和女子大学の学長を務める。著書に『女性の品格』『親の品格』(PHP新書)など。